

高崎観光協会 会報

縁起のいいまち
高崎

冬号
Winter
VOL.137

2017

日本一の高崎だるま®

地域に息づく伝統工芸



若い世代や海外の人々にもだるまのこころを伝えたい

いまい ひろひさ
今井 裕久さん
今井だるま店 代表
高崎市上豊岡町 78
TEL.027-323-5145
http://www.
imai-daruma.com



日本一の高崎だるま®

地域に息づく伝統工芸

だるまの産地として名高い高崎市。玄関口の高崎駅には、だるまのモニュメントや陶板壁画、だるま弁当、土産物店の棚には開運祈願の色とりどりのだるまが並ぶ。商店街を歩けば店独自のユニークなだるまに出会え、だるまは高崎のシンボルになっている。

「だるまの里」といえば豊岡地域。ここでは農家の副業として200年ほど前からだるま作りが行われてきた。国道17号線から18号線に入り安中方面へ車を走らせる。土手の向こうを流れる碓氷川と国道が平行に伸びると間もなく、5つのだるまが並んだ案内表示が見えてくる。師走に入るとだるまの里は一年で一番忙しい時期を迎える。



「幸福のだるま」作 / 宮田亮平 (前東京芸術大学学長)
高崎駅西口に並ぶ紅白のだるま



◀ 80年余もだるま作りが行われてきた納屋



養蚕農家がつって広めただるま

「だるま」は、座禅ざぜんをする達磨だるま大師の姿と心を張子はりこで表したものだ。達磨大師は、インドから中国に禅を伝えた禅宗の開祖で、説いた教えは鎌倉時代に日本に伝わった。洞窟の壁面に向かって9年間座禅を組んで修行をしたという話は有名。七転び八起きななよちやひちよきの起き上がりこぼしは、何事にも動じない不動なる座禅の心。だるまの鮮やかな赤色は、達磨大師が身にまとった緋色の衣、あるいは、赤いものが邪氣まじろを払うと江戸時代の疱瘡ほうそう（天然痘）除けに用いられたことに由来する。

高崎では豊岡地域の農家が農閑期に副業としてだるま作りを行ってきた。

始まりは200年ほど前。養蚕が盛んだったこの地域では、蚕まゆの繭まゆづくりの準備ができたことを「蚕が起きる」と言ったことから、だるまの「起き上がる」と重ね、蚕が良質な繭をたくさん作るよう縁起を担いだ。眉毛は「鶴」、ひげは「亀」をかたどり、おなかには「福人」というおめでたい文字が書かれ、顔の両脇には繭や農作物の豊作を願う言葉が入られた。

だるまの里の原風景

女性の肌が大敵な上州からつ風も、だるまの生地や塗料を乾かすにはもってこいの風になる。乾いた風が適温で強く吹く高崎地域は、だるま作りに適した土地柄。今でも夫や親子を中心に地域のパートさんの手も借りながら家族総出で取り組み、塗る・乾かす・描くといった工程が、ふすまを取り払った座敷や納屋でひとつひとつ手作業によって進められている。晴れた日には、だるまを刺した巻俵まきわたが庭先に運ばれる。寒風にさらされ太陽の日をいっぱい浴びながらだるまは強度を増し、縁起物としてのパワーを蓄えていくようだ。温かくて懐かしい風景の中から高崎だるまは生まれてくる。

だるま職人として表舞台に立つ

国道からだるまが縦に三つ並ぶ交差点を右折して集落の路地に入ると、だるまをイメージさせるぼつりとした赤壁の建物が現れる。ここは1930年創業の今井だるま店で、3代目の今井裕久いまいひろひささんが新たにオープンした店舗兼工房。誰でも気軽に立ち寄り、だるま作りを親しめる場所、地域の人々が集える場所として、だるま作りの歴史が紡がれてきた農家の納屋にちなんで、名称を「NAYA」とした。今井さんがめざす新しいだるま作りの拠点となっている。

高崎のだるま界を牽引する若きリーダーとして期待が寄せられる今井さんは、近年、機関車の出発式やシティープロモーション、ユニセフの香港イベントで、だるま職人として「顔描き」を披露してきた。「多くの人に高崎だるまを知ってもらい、親しんでもらえるチャンス。業界が活性化するために、だるま職人が表に出ることも必要」ととらえている。

モダンな暮らしに

フィットするだるま

また、伝統的なだるまに現代的な



デザイナーズだるま▶

感覚を融合させた「デザイナーズシリーズ」（だるま・まねきねこ・うさぎ）の製造販売も手がける。「神棚のない洋風な家屋に調和するもの、おしゃやれでモダンなものを求めるお客様の声に応えることで、暮らしに未永く寄り添えるロングライフ商品になってほしい」と考えている。

「達磨だるまという漢字のごとく、目標を達成するために自分を磨く。たとえ転んでも一歩進めば、自分を変え



◀◀今井だるま店の店舗兼工房「NAYA」



るチャンス！と思つて立ち上がる。そんなだるまに込められた想いに触れ、生きる励みにしてほしい」と今井さんは、モダンなだるまにも縁起物としての普遍的な願いを込める。

海外需要に目を向けると、欧米の人々には縁起を担ぐという習慣がない分、日本人の心や習慣を伝える一つの手段として、だるまはユニークな存在だ。「外国の方には、伝統的なだるまのほうが、日本の雅なものとして人気があります」と、今後も積極的なアプローチを続けていく。

**鶴の眉と亀のひげを描き入れる
熟練の手による神聖な祈りのよう**

今井さんの仕事の様子を見せてもらう。目の回りにオレンジ色のぼかしをほどこし、小鼻と口が描き込まれただるまが仕上げを待つ。今井さんが大きなだるまを取り上げ、描きやすいように態勢を整え「顔描き」に取りかかる。墨汁を付けた筆が決まった旋律をなぞるように、さらさらとよどみなく滑らかに動き、鶴の眉毛と亀のひげが、ほんの10分程度で描き上がる。「納得のいくクオリティを求めるなら、一人前になるまでに10年は必要」と、今井さんならではの見解がある。今井だるま店では、だるまの顔描きは、当主だけに許された特別な仕事となっている。

それだけに、縁起物のだるまを作る者の心得として、心の鍛錬や立ち振る舞いへの配慮を欠かすことなく、日々精進を自らに課している。

**作って売る
先人の旺盛な商魂に脱帽**

高崎だるまが全国シェアNo.1になった背景には、いくつかの要因があった。晩秋から冬にかけては、養蚕農家が農閑期になるため豊富な労働力があつたことや、40年ほど前に真空成形が発明されたことで、だるま生地の生産量が飛躍的に拡大したこと。また、養蚕の繁栄を願って縁起を担いだだるまは、正月三が日に群馬県内各地はもろろん養蚕の盛んな他県でも、だるま市でたくさん売りに買ひされてきた。

「何より驚くのは、先人たちの旺盛な販売スピリッツです。厳しい寒さの中、遠くは埼玉県の大宮までだるまを積んだりヤカーを引いて歩いて行つたという武勇伝を聞いています」。今井さんは、自分の頑張りなど遠く先人には及ばないとばかりに、新しい時代のだるま作りに情熱を傾ける。

**だるま生地の生産性を
著しくアップした真空成形**

水分をたっぷり含んだ出来たてのだるま生地が棚に並んで寒風にさらされている。(有)だるまの幸喜では、他のだるま店とは少し違った風景がある。それもそのはずで、同社では、だるまの生地を製造し複数のだるま店に供給するという役割を担っている。代表の旭剛正さんの父親彰さんが室内装飾業を営んでいた時に、「だるまの生地が不足している」

だるま作りの工程



①生地作り：木型を使った生地作りから「真空成形」に代わり製造効率が格段にアップ。再生紙などを水でかくはんした水槽に、だるま型の鑄型が入った箱を浸し、真空ポンプで吸引、鑄型に吸着させる。鑄型の中に厚さ5ミリほどの生地ができる。そつと取り出して表面の肌をきれいに整え、天日で2~3日乾燥させる。



②下塗り：乾燥させた二カワをお湯で溶かし、国産のかき殻を焼いて粉にした胡粉(ごふん)を入れて下塗り用の塗料を作る。だるまの生地の底にヘッタと呼ばれる重りを下塗り用の塗料で接着してから、生地にも塗料を塗って天日で乾燥させる。この下塗りをすることで、生地を保護強化し最後に塗る赤色の発色が良くなる。



生地の安定供給で高崎だるまの生産を支える

あさひ たかまさ
旭 剛正さん
(有)だるまの幸喜 代表
高崎市上大島町 12-7
TEL.027-344-1043
http://www3.wind.ne.jp/
darumanokouki/



と相談を持ちかけられたことがきっかけとなり、真空成形の設備を導入し、だるま生地の製造卸業を手がけるようになった。
新聞紙や卵の輸送用パックなどの材料をドロドロにかくはんした水



槽の中に、だるまの形をした鑄型が入った箱を浸し、真空ポンプで吸引すると、材料が鑄型に吸着する。箱を引上げて鑄型を開くと厚さ5ミリのだるま型の生地が出来ている。「豆腐よりも柔らかい」という成形したての生地を丁寧にと取り出し表面のキメを整え、天日で2〜3日乾燥させたら完成となる。
木型で生地を作っていた時代から比べると、生産量が著しく向上したのも納得で、高崎だるまの生命線を握る工程といえる。「再生紙が多いと、紙の繊維が短くて成形しにくいことがあります。化粧箱の端切れ

などを混ぜて調整します」と、昔ながらのだるまを現代の資源事情に合わせて作るのも苦労があるようだ。だるまには様々な大きさがあり、同社では22種類の鑄型で対応している。
また、起き上がりこぼしになるようだるまの底に取り付けるヘツタという円形の重りも、土から練って作っている。

「一部機械化による効率化が図られたとはいえ、まだまだ熟練した職人の手でないとうまくいかない工程もあり、女性には厳しい力仕事もあります。作業の大変さを軽減して、だれがやっても均一な結果になるよう、設備機器に改良改善を加えていくならと考えています」。だるま店のだるま作りを支え盛り立てたいという剛正さんの想いがある。

一方で、だるま店との付き合いが増え、高齢化や人手不足の悩みを抱えるだるま店から、だるま作りの工程の一部を担ってほしいという要望を聞くことが増えた。そうした声に応えるうちに、だるま作りの全工程を手がけるようになった。

後継者のいないだるま店が廃業する中、これもまた、新しい時代に向けた高崎だるまの生産を支える一つの姿といえる。



④顔描き：小鼻と口を描き入れ、最後に墨汁で「鶴」を表す眉毛、「亀」を表すひげを一気に描き上げる。顔の両脇には「家内安全」「商売繁盛」など金文字で書き、一年の願いを込める。



③着色：昔は一つずつ手に取って刷毛で塗っていたが、今は着色料の中に浸して着色。赤色の塗料が乾燥したら顔の部分に白く塗り、乾いた後に目の周りにオレンジ色の塗料を吹き付け化粧する。



高崎の味と縁起を出前する 『開運たかさき食堂』

ふるさと祭り東京 2017



1月7日(土)~15日(日)

●会場：東京ドーム

●入場料

当日券 1,600円 (1,400円)

イブニング券 1,100円

平日限定当日券 1,300円 (1,100円)

[1月10日~13日有効]

※税込料金。()内は前売り。

※小学生以下のお子様は大人1名の付添いにつき4名まで無料。

<http://www.tokyo-dome.co.jp/furusato/>

●東京ドーム

今年4回目の出展となる東京ドームのふるさと祭り。日本全国から旨いものが一堂に会する中、「高崎のだるま糺祥地」「白衣観音」「榛名神社」の三大縁起スポットを誇る高崎が、名物をぎっしり詰め込んだ『開運たかさき食堂』を出展！今年も高崎ブームを巻き起こす！

●スイーツからパスタまで

「だるま弁当」に「焼きまんじゅう」「ぼるもん焼き」「もつ煮」に加え、ソフトクリームにジェラート、豚モツとすいとんが入った「からっ風汁」が初登場。キングオブパスタの歴代優勝店も日替わりで4店舗出店。和菓子、洋菓子店のスイーツも加わり、老若男女だれでも楽しめるブースになりそう。

●移動パワースポット！

昨年同様、白衣大観音の巨大模型やだるまが並んで来場者を迎え、誰でも自由に絵馬に御祈願できる。おみくじで当たりが出れば小だるまをプレゼント。まるで「出前パワースポット」のよう。

毎日先着200名様に小だるまのプレゼントもある。ふるさとステージでは、250年以上にわたって伝承されている大八木町の獅子舞も披露される。

●お問い合わせ：(一社)高崎観光協会 TEL.027-330-5333

EVENT

EVENT

榛名の梅祭り

3月19日(春分の日)

●会場：榛名文化会館(エコール)前庭
9:30~15:30



毎年恒例の榛名の梅祭りは、3月の第三日曜日に行われる。梅林の中、散策をのんびり楽しむスタンプラリー。梅干し、梅ジュース、梅うどんなどが振舞われる。梅干しの種飛ばしコンテストは毎年100名程の老若男女が競い合い、面白い笑いに包まれる。その他、トテ馬車乗り放題やキャラクターショー、芸能ショーなど、春の一日を満喫できる催しが目白押しだ。

●お問い合わせ：榛名観光協会 TEL.027-374-5111

群馬県は全国2位の梅の生産地。中でも高崎は県下随一の梅の里が広がる。



みさと梅まつり

3月初旬~下旬

●会場：箕郷梅林(高崎市箕郷町富岡・善地)
●JR 高崎駅から車で約30分
●駐車場料金：普通車 300円
大型車 1,000円
バイク 100円



●「梅枝・ume 味満喫キャンペーン」
3月5日(日)、12日(日)の正午~
梅の切り枝、梅ジュース、梅まんじゅう等をプレゼント
●「野点」3月18日~20日(土・日・祝)*雨天中止

300ヘクタールの敷地に約10万本の梅が栽培されている箕郷の梅林。3月上旬から下旬の間に一斉に花を咲かせ、緩やかな丘陵地は白い絨毯を敷き詰めたかのような景色となる。甘酸っぱい香とともに、榛名山麓のひと足早い春を満喫できる。祭り期間中、特産の梅の加工品や地元野菜、おやき等を販売。梅の里ならではの野点も楽しめる。

●お問い合わせ：箕郷支所産業課 TEL.027-371-5111

春の風物詩・市民映画祭の新たな挑戦

第31回 高崎映画祭

3月25日(土)～4月9日(日)

- 会場：群馬音楽センター
高崎市文化会館
高崎シティギャラリー
高崎電気館
シネマテークたかさき

<http://takasaki.film.gunma.jp/>



●充実のラインナップでお届けする
16日間

1987年から毎年春に開催されてきた市民映画祭は31年目に突入した。今年も充実したラインナップが期待できそう。邦画洋画ベストセレクションを始め、特集上映や若手映画作家の作品などは、県内初上映作品も多く紹介される。新しい映画、知らない映画との出会いに期待が膨らむ。

●授賞式は群馬音楽センターで開催

2016年に公開された邦画を対象に、高崎映画祭作品選定委員会が選出する各賞は、映画ファンのみならず映画関係者からも注目されている。映画界を背負って立つ才能がずらりと並ぶ姿は圧巻だ。授賞式は3月26日(日)、群馬音楽センターで開催。映画と観客をつなぐ華やかなイベントをぜひ楽しみにしてほしい。

●高崎映画祭の新たな挑戦

地方でなかなか見られない映画を観たい、観せたいから始まった市民映画祭は、そのコンセプトのもとバラエティに富んだ映画を毎年紹介してきた。これまで、世界各国の様々な映画を紹介することに注力してきたが、今後は高崎で生まれた映画、高崎で見つけた映画を世界へ発信することにも挑戦していく。そんな動向にもぜひ注目してみしてほしい。

●お問い合わせ：高崎映画祭 TEL.027-326-2206

EVENT

第26回 はるな梅マラソン

3月12日(日) ※参加募集は終了しました。

- 会場：榛名文化会館エコー林



Marathon Running

走る人の心と迎える人の温かな交流が魅力のはるな梅マラソン。市民ボランティアの笑顔のもとながしを会を支えている。榛名梅林の中を走り抜け、清流鳥川沿いを走る人気のハーフコースは適度なアップダウンが挑戦者の心をつかみ、親子で手を繋いでゴールするファミリーコースなど、全5コースを用意。入賞者にはトロフィー、盾、梅製品などが贈られ、完走者対象のお楽しみ抽選会には「榛名湖温泉ゆうすげ賞」ペア宿泊券など、特典がいっぱいだ。初春の榛名を爽やかにランナー達が駆け抜ける！

●お問い合わせ：TAKASAKI CITY はるな梅マラソン実行委員会事務局
TEL.027-374-6715



「上野三碑」一般公開

3月5日(日)

- 会場：上野三碑 所在地

平成29年のユネスコ
「世界の記憶」登録に期待！



山上碑



金井沢碑

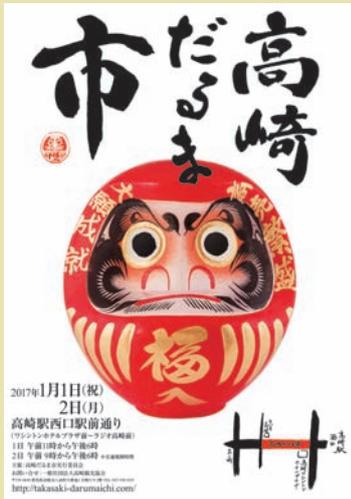
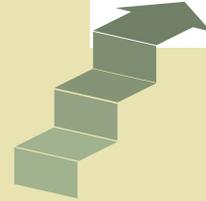


多胡碑

日本に18例しか現存しない古代の石碑のなかで、高崎市南部に最古の石碑群「上野三碑」が存在することは極めて貴重なこと。山上碑(681年)、多胡碑(711年頃)、金井沢碑(726年)と呼ばれ、こうした石碑文化は渡来人がもたらしたものと考えられている。三碑ともに東アジアにおける文化交流の実像を示す重要な歴史資料。当日はボランティアによる解説も行われ、通常はガラス越しにしか見られない碑を間近に見られる年に一度の機会となる。

●お問い合わせ：多胡碑記念館 TEL.027-387-4928
文化財保護課 TEL.027-321-1292

高崎でだるまを作り始めた頃 高崎田町の初市



高崎だるま市
平成 29年 1月 1日(祝)、2日(月)
高崎駅西口駅前通り
1日: 午前 11時から午後 6時
2日: 午前 9時から午後 6時
※交通規制時間

ここは高崎城下、文政(1818~1830)の頃の正月十日。城下で初市が開かれ、中山道は押すな押すなの大にぎわいである。城下に住む絵師、青木周溪は人波に身をまかせながら街道を歩いていた。

初市は町衆の信仰を集める「市神様」のお祭りでもある。前夜からの酒盛りは大騒ぎであった。通りには色とりどりの幟や大きな飾り物が立ち並び、芝居小屋も立った。「さすがは当国一のにぎわい」と目をみはるばかりである。大きな歓声の方向に目をやると、商家の屋根から掛け声とともに餅がまかれていた。大人、子どもが押し寄せ「福を拾った」と大喜びであった。

人通りの多い一等地に浮世絵屋が店を出していた。役者絵や美人画をずらりと並べ、ずいぶんと繁昌しているようだ。浮世絵屋から出てきた男が連れの女の袖を引き、指差す先に、ねじり鉢巻き姿でだるまを売る男の姿があった。

「さあさあ、御用とお急ぎでない方は、寄っておいで見ておいで。」お江戸見たけりや高崎田町、細ののれんがひらひらと」と唄われているのが、この田町でございますな。中山道随一の宿場、高崎を過ぎますと、お江戸日

本橋から28里、豊岡の一里塚、その豊岡の山縣友五郎が丹精込めましたのが、ここに並べましたる、赤いだるまでございませう。

だるま売りは、一畳程度の屋台を広げ、台の上に大小10数個のだるまを並べていた。

「ほう、その娘さん、よく見て、おくんないやね。いやいや、あつしの顔でなくて、こつち、だるま。江戸で大評判の病除け、疱瘡除けのだるまでございませう。秘伝によりまして蘇芳から取り出しましたのが、この赤い色。

売っているのは、真つ赤な江戸だるまである。江戸では疱瘡除けとしてだるまが庶民に広まっていた。古来から疱瘡(「天然痘」)は、命にかかわる疫病として、麻疹とともに恐れられていた。治療法がなく、祈禱やおまじないが唯一の手立てであった。

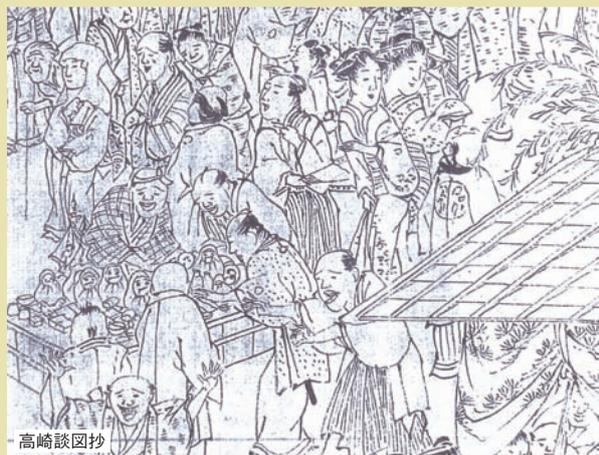
赤いだるまも疱瘡除けで大いに売れた。豊岡に住んでいた山縣友五郎という人物が江戸でだるま作りを習得し、戻ってきて始めたのが、高崎でのだるまの発祥という。

赤色が魔除け、病除けの不思議な力を持つと考えられたのは、人工的に作り出すのが難しい色であったためと言われ、だるまを塗る赤色塗料は貴重だった。当時、蘇芳から採った植物染料を使っていたが、その製法を友五郎

は秘伝としたので、江戸時代における高崎でのだるま作りは友五郎ゆかりの者に限られていた。だるま売りは口上を続けた。

「だるまの御利益は、まだまだございませう。このように転がしても起き上がり、人生七転び八起きでございます。

初老の絹商がだるまを一つ買い求めた。「さて、今日のことを書きとめておきたいものだ」。周溪は家路を急いだ。こうして周溪は文政12年(1825)高崎の寺社旧跡や行事を記した「高崎談叢抄」30巻を書き上げた。その後、高崎のだるまが日本一となると、周溪も、友五郎も、この初市のだるま売りも思わなかったであろう。



高崎談叢抄

